

# ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1)

—台湾ヤミの生活環境史—

足 立 崇

Progress of the Benjamin Sewall incident 1

— Living Environmental History of the Yami in Taiwan —

ADACHI Takashi

日露戦争間近の1903（明治36）年10月、米国船ベンジャミン・セオール号はシンガポールから上海に向け航行中、台湾南沖合で台風に遭い、航行の自由を失った。乗組員23名は沈没を恐れ棄船し、附属のボートに避難した。船長たちの乗った1艘のボートは鷺鑿鼻に漂着し救助されるが、もう1艘のボートは紅頭嶼（現：蘭嶼）附近を漂流し、一部の乗組員は紅頭嶼に漂着、他の乗組員は溺死してしまう。その後、日本による1回目の捜索でフィリピン人1名とロシア人1名の生存者を救助し、日本と米国による2回目の捜索で日本人3名の生存者を救助する。米国は生存者の証言から溺死の原因を紅頭嶼に住む先住民ヤミによる強奪と判断する。翌年1月、米国からの要請を受けた日本は紅頭嶼へ討伐隊を派遣することを決定し、加害者がいるとされる3集落を捜索し、10名を逮捕、武器を押収し、家屋13戸を焼き払った。これをベンジャミン・セオール号事件という。この事件はヤミにとって国家による力の介入を受けた最初の出来事であり、その後の日本による紅頭嶼統治のあり方に大きな影響を与えたものである。しかし、これまで事件の概略は知られていたものの、その詳細な経過については明らかにされてこなかった。本稿は日本統治時代におけるヤミの生活環境変容をみていく足がかりとして、この経過を明らかにするものである。

ベンジャミン・セオール号事件に関する資料としては、台湾総督府の公文書『台湾総督

府公文類纂』(4749冊-2号, 4810冊-1号, 4811冊-1号, 4814冊-3号)がある。これは事件に関する多くの文書を含んでおり、現在国史館台湾文献館にて整理保管されている。また、海軍省の公文書『公文雑輯 艦船三止・水路』(M36-4)にも事件に関する文書が含まれている。これは防衛省防衛研究所図書館において整理保管されている。伊能嘉矩(1867-1925)は1917年の『東洋時報』(225, 226, 228)に「台湾外交史料 ベンジャミン・セオール号事件」と題する三稿を報告している。さらに自らが編纂した『理蕃誌稿』第1巻(1918)にも、15頁にわたり同文が記載されている。これらはその内容から総督府公文書にもとづいて書かれたものと推測される。『台湾日日新報』には事件発生から事件終結にいたるまでに21編の記事が掲載されている。ダグラス・エガン(1902-?)の*SHIP-BENJAMIN SEWALL-*(1983)には、ベンジャミン・セオール号の造船、進水式からその後の航海、ベンジャミン・セオール号事件とその後についてまで記されている。余光弘・董森永の『台湾原住民史 雅美族史篇』(1998)にも事件にかんして6頁にわたる記述がある。『台湾原住民史 雅美族史篇』は、ヤミ出身の牧師である董森永と中央研究院民族学研究所の余光弘によるもので、ヤミの人が体験してきた歴史を口述や資料をもとに記述した、いわばヤミの側から見た歴史といえる。

本稿は、『台湾総督府公文類纂』、『公文雑輯』、『理蕃誌稿』、『台湾日日新報』、*SHIP-BENJAMIN SEWALL-*など日米の資料を中心にして、事件の経過を表に整理するものである。『台湾原住民史 雅美族史篇』(1998)はヤミの口述による事件の記録であり、内容は他の資料にない具体的なものもあり重要であるが、事件の発生した月が日米の資料と半月以上も異なり、詳細な月日の記載もほとんどないため、本資料に組み込むことはできなかった。よって、本資料はあくまで日米の資料をとおして見たベンジャミン・セオール号事件の経過であることを断っておきたい。紙幅の都合上、本稿ではベンジャミン・セオール号が遭難した1903年10月初旬から、2度目の遭難者捜索が行われた同年10月末までの1ヶ月間の経過表を示す。討伐隊が派遣されるなどしたそれ以降の経過を示す表については次稿に回したい。

本事件を考えると、ヤミの人々が実際に遭難者に対して強奪行為をし、死に至らしめたかどうかが問題になる。これについては、当時の証言記録内容もさまざまであり、日時などもくい違いが多く、事件の要点でありながら本資料に含めることはできなかった。これについては『台湾原住民史 雅美族史篇』の記述も含め、それぞれの意見を別に整理する必要があるだろう。

台湾本島および蘭嶼の地名については資料対応関係の便宜上、当時の地名のままに記載している。たとえば、「蘭嶼」については「紅頭嶼」とし、各集落名は当時の公文書に多

く見られる「イモロナモン」(現:イモロッド, 紅頭), 「イラタイ」(現:イラタイ, 漁人), 「イワタス」(現在なし), 「ヤユ」(現:ヤユ, 椰油), 「イモロソック」(現:イララライ, 朗島), 「イワヌミルク」(現:イラヌミルク, 東清), 「イワキヌ」(現:イヴァリヌ, 野銀) としている。

典拠については便宜上, 『台湾総督府公文類纂』4749 冊-2 号を「総 a」, 『台湾総督府公文類纂』4810 冊-1 号を「総 b」, 『台湾総督府公文類纂』4811 冊-1 号を「総 c」, 『台湾総督府公文類纂』4814 冊-3 号を「総 d」, 『公文雑輯』M 36-4 を「公」, 『理蕃誌稿』を「理」, *SHIP-BENJAMIN SEWALL-* を「S」, 『台湾日日新報』を「台」と記載する。「総 a」, 「総 b」, 「総 c」, 「総 d」, 「公」, 「理」, 「S」の後に記載された数字は頁数を示し, 「台」の後に記載された数字は発行月日を示す。

本経過表の期間, 総督府で主要ポストにいた人物の動向について見ると, 総督児玉源太郎は内務大臣や文部大臣など日本との兼職が多かったため日本に滞在しており, 台湾にはいなかった。とくにこの時期は, 日露関係が緊張を増していたため, 1903 年 9 月に文部大臣を免じられ, 10 月には内務大臣を免じられ, かわりに参謀本部次長に就任し, 日露戦争勃発後の 1904 年 6 月には陸軍大将に任命されている。民政長官後藤新平は, 1903 年 11 月 20 日に貴族院議員に勅選され, 帝国議会出席のため 11 月 17 日から翌年 2 月 16 日まで日本に出張し, おなじく帝国議会出席のため 3 月 8 日から 4 月 30 日まで日本に出張している。参事官長兼総務局長の石塚英蔵は日本に滞在しており, 台湾にはいない。警察本署長(警視総長)大島久満次は民政長官後藤不在中の代理を命じられ, 総務局長石塚不在中も代理を命じられている。また, 1897 年の第一次紅頭嶼調査にも参加していた台湾米国領事ジェームス・W・デビッドソンは不在で, 米国副領事 A. C. ランバートが代理を務めている。

### ベンジャミン・セオール号事件経過表

年月日	事項	内容	典拠	備考
1903年 8月29日	午前9時, 米国船ベンジャミン・セオール号がシンガポールから上海に向け出航。		S69, 118・理318, 733・台10/17・総a47・総c10, 30, 64・公1125	8月25日という記述もある(S69, 118)。8月27日という記述もある(総c30, 総c64, 公1125)。
10月4日	台湾南の沖合で台風に遭う。		理318, 733, 735・総a47, 90-91・総c10, 31, 64, 91	
10月5日	午前4時, マストが3本折れ, 舷側が破壊され, 船体の三分の二が浸水, 航行の自由を失う。		理735・S78・総a77, 91・総c31, 64, 91・公1125	午前1時頃という記述もある(総c31, 91)。

10月5日	午前9時、船員23名はセオール号を棄てボート3艘に分乗する。その後、1艘が浸水したため2艘に再分乗。	浸水したボートには主要な飲料水と食料を積んでいたが海に沈む。船長の乗った1艘には数個のフルーツの缶詰、肉の缶詰、ビスケットのみ(飲料水なし)。もう1艘には数個のパイナップルの缶詰、ミルク缶3個、塩肉とビスケットのみ(飲料水なし)。	理733・台10/10・S71-72, 79, 82・総a15, 47, 77, 91・総c11, 31, 64, 167・公1125	午前8時頃退船用意をし、午後1時頃全員3艘に分乗という記述もある(総a91, 総c64, 公1125)。10月8日という記述もある(S82)。
10月6日	英国船オロ号が、遺棄されたベンジャミン・セオール号を発見し、一等航海士を派遣して調査。	ジャワから神戸港へ航行中のオロ号が漂流中のベンジャミン・セオール号を北緯21度30分、東経122度15分のところで発見。ベンジャミン・セオール号のクロノメーターは捲いてから48時間を示す。船中には豚一頭と鶏一羽残るのみ。	台10/25・S74, 78・総a64, 67-68	
	午後3時、オロ号がベンジャミン・セオール号を曳こうとするが、風波荒く困難。		台10/25・S74・総a67-68	
	午後4時30分、オロ号の3本の曳き綱が切断され、中止。	クロノメーターや他の装置を回収。	台10/25・S74・総a67-68	
	午後5時30分、派遣していた一等航海士と水夫をオロ号に呼び戻し、予定航路を進行。		台10/25・総a67-68	
	午後6時頃、ベンジャミン・セオール号乗組員の乗った2艘のボートが離ればなれになり、やがてお互いを見失う。		S72・総a48, 77, 91・総c32, 92	10月5日の夜とみられる記述もある(S72)。10月5日の午後という記述もある(総a48)。
10月7日	午後3時頃、船長のボートが台湾本島沖に漂流するも、鰲鑿鼻燈台は見えず。		総a78	
	午後3時頃、もう1艘のボートは紅頭嶼付近を漂流。その後、5名は紅頭嶼に泳ぎ着き、7名は溺死する。		理735-736, 台10/25・S73, 79, 82・総a70-73・総b16-37・総c13, 32, 65, 92・公1125	紅頭嶼附近に漂泊したのは10月8日の午前という記述もある(総c65・公1125)。ヤミの人に発見されたのは、10月8日の朝(総c13, 32, 92)、10月9日午前8時頃(理735-736・公1125)、10月10日の日没前(S82)という記述がある。

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月8日	午前3時頃、船長のボートが鷺鑿鼻燈台に漂着。		理734・台10/9, 10/20・S72・総a47, 77・総c13-14	10月7日とみられる記述もある(S72)。10月7日午前1時という記述もある(台10/20)。10月9日という記述もある(理734・総c13-14)。10月9日午前2時とみられる記述もある(台10/9)。
	午前4時頃、漂着者11名が鷺鑿鼻警察派出所に救助される。		理734・台10/9, 10/20・S72・総a47, 77	
	英国船ウンバラ号が遺棄されたベンジャミン・セオール号を発見。曳こうとするが、力が足りず中止。		S74, 78	
	午後2時、漂着者救護の命を受けた恒春庁警務課長荒巻鉄之助と警部補伊斗兵、恒春庁属早川正太郎が、大板轆から竹筏で急行し鷺鑿鼻警察派出所に到着。	船長ホルスタードに事情聴取する。	総a77	
	午後2時、須磨丸(大阪商船)が南湾に到着。	生存者11名、恒春庁警務課長荒巻鉄之助ほか出張員を乗船させる。	総a55, 78	午後4時という記述もある(総a78)。
	午後3時37分、須磨丸が南湾を出発し、午後4時20分、大板轆に到着。	恒春庁警務課長荒巻鉄之助ほか出張員は総督府からの命令を待たため、大板轆に上陸する。生存者11名は乗船したまま。	総a55	
	午後6時55分、須磨丸が生存者11名を乗せたまま大板轆から打狗へ向け出発。		総a55	
	午後8時55分、恒春庁長森尾茂助から総督へ打電。	遭難状況について説明し、船長含む遭難者11名の乗ったボートが鷺鑿鼻に漂着したこと、須磨丸(大阪商船)がそれら11名を送還させるため出航したが、その後行方不明者12名の捜索命令が出たため、打狗から引き返す筈であることを伝える。	総a15-24・総c167	
10月9日	午前0時10分、須磨丸が打狗に到着。		総a55	
	午前0時35分、恒春庁から須磨丸へ打電。	総督府から須磨丸に遭難者捜索のため大板轆へ引き返すよう要請。	総a55	

10月9日	午前4時20分、須磨丸が打狗を出発。		総a56	
	午前9時56分、大板轆に到着し、警務課長荒巻ほか出張員を便乗させる。	恒春庁警務課長荒巻鉄之助、警部補伊斗兵、恒春庁属早川正太郎、巡查村上十七八、若松春峯、吉崎三吉の6名を乗船させる。	台10/10、10/20・総a56、78	
	午前10時45分、須磨丸が大板轆を出発し紅頭嶼へ向かうが、強風のためなかなか航行できず。		台10/10、10/20・総a56、78-79、96	午前10時20分という記述(総a78)や午前11時という記述(総a96)もある。
	午前11時40分、恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	須磨丸が警務課長一行を便乗させ紅頭嶼に向かっていることを伝える。	総a96-98	
	午後0時15分、須磨丸がいったん南湾に引き返し停泊。		総a56、79	午後0時10分という記述(総a79)という記述もある。
	米国副領事A. C.ランバート(領事代理)から民政長官後藤へ通知。	生存者11名が鷲鑿鼻に漂着したという民政長官後藤からの報に謝意を表し、もう1艘のボートに乗っている遭難者を捜索するため、廈門の米国領事に軍艦での捜索を打電し要請したと伝える。	総b6	
10月10日	午前6時50分、須磨丸が南湾から紅頭嶼へ向け出発。		総a48、56、79	午前7時20分という記述もある(総a79)。
	午後0時30分、須磨丸が紅頭嶼の矢代湾へ到着。		理734・台10/14・総a26、48、56、79・総c15、97	午後0時10分という記述もある(総a79)。午前10時という記述もある(総c97)。
	午後1時30分、警務課長荒巻以下が上陸し、派出所駐在取締巡查有賀新太郎、派出所詰巡查白土忠隆らを訪問して状況を聞く。	紅頭嶼派出所は10月4日の台風のため損壊。派出所には5名の巡查が勤務していたが、内1名は9月に卑南に行き療養中で不在。巡查達はヤミの人の家屋に避難するなどして雨露をしのいでいた。そのため派出所巡查達は遭難者が漂着したかどうかを知らず、警務課長一行はいったん船に戻る。	総a56-57、79・総c87-88	
	午後2時10分、警務課長荒巻ほか巡查一同が再上陸。		総a57	
	午後4時、警務課長荒巻一行が派出所詰巡查白土の案内で島周辺捜索のため出発。	イラタイ、イワタス、ヤユを午後6時30分まで捜索し異常なく、この日はヤユに泊まる。	総a57、79・総c97	午後3時出発という記述もある(総c97)。

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月10日	民政長官後藤から米国領事へ通知。	10月8日付の恒春庁長森尾からの電報を添付して遭難状況を説明し、目下須磨丸を回航させ捜索させているので報告を得次第詳細に報告すると伝える。	総a14-24	10月9日立案、10月12日決済、10月10日発送。民政長官、参事官長(後藤花押)、総務局長(代理不鮮明印)、警察本署長(大島印)。10月10日付。
	オロ号船長コールマンから長崎のロイドエージェントへ通知。	10月6日に海上で漂流を確認したベンジャミン・セオール号について、その状況を詳細に報告し、他の船の航行上危険であることを伝える。	総a67-68	10月10日付。
10月11日	午前6時、警務課長荒巻一行が捜索のためヤユを出発。午前9時、イモロソックに到着。	イモロソックの住民からイワヌミルクに生存者がいると聞き、イワヌミルクに向かう。	総a80, 総c97	
	午前11時30分、イワヌミルクに到着。ヤミの人に保護されていたウィリアム・ラインワルド(ロシア人)、ジュリアン・サリオ(フィリピン人)の2名を発見。警務課長荒巻が2名を事情聴取。	発見された状況からヤミの人々の救助の意志を認め、ヤミの主立った救助者2名に応分の賞与をなす。	総a48, 80, 総c97	午後という記述もある(総a48)。
	午後3時、紅頭嶼駐在巡查有賀が須磨丸に赴き、小紅頭嶼に遭難者の形跡なしと報告。	巡查有賀がヤミの人とヤミの船で朝に出発し小紅頭嶼を捜索した結果。	総a57-58・総c97	
	午後3時5分、警務課長荒巻ほか救助した2名を引き連れ須磨丸に戻る。午後3時30分、2名を遭難船船長ホルスタードに引き渡す。	遭難船船長ホルスタードが2名に事情聴取。ラインワルドは警務課長荒巻に話したとくち違ひ話をする。	総a48, 57, 81-82	
10月12日	午前5時50分、須磨丸が紅頭嶼の矢代湾を出発。南方より東方して廻る。		総a58, 82	午前6時という記述もある(総a82)。
	午前7時10分、須磨丸が紅頭嶼の東清湾に到着。		総a58, 82	午前7時という記述もある(総a82)。
	午前8時、警務課長荒巻一行が上陸し、紅頭嶼駐在巡查白土、古市2名とともにイワヌミルクを捜索。	「ゴム長靴」半足、「セル地ズボン」一着、「アヤ地上衣」一着を附近の山中より発見。	総a58, 82・総c97-98	
	午前10時40分、派出所巡查2名を残留し、一行が船に戻る。	生存者2名(ウィリアム・ラインワルド、ジュリアン・サリオ)の身柄と発見品3点を遭難船船長ホルスタードに引き渡す。	総a82・総c98	
	午前11時5分、須磨丸が紅頭嶼の東清湾を出発。大板轆へ向かう。		台10/14・総a58, 82・総c98	午後0時という記述もある(総a82)。

10月12日	午後4時, 須磨丸が大板轆に到着。		総a49, 59, 82	午後5時という記述もある(総a82)。
	午後7時50分, 恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	紅頭嶼搜索の結果, ロシア人, フィリピン人2名を救護したこと, 他は生死不明であること, 須磨丸は米国領事に引き渡すため生存者13名を乗せ基隆に向かっていることを伝える。	総a26-32	
	午後9時50分, 須磨丸が大板轆を出発。	警務課長荒巻ほか上陸。	総a59	
10月13日	午前6時20分, 須磨丸が安平に到着。		総a59	
	午前11時, 米国軍艦オーストリア号が遭難者搜索の命を受ける。		S82	
	午後2時, オーストリア号が台湾南岬に向かう。		S82	
	紅頭嶼駐在巡査が総員挙げて遭難者搜索を続ける。		総c98	
	警務課長荒巻から恒春庁長森尾へ遭難者救助・搜索に関する詳細な復命書を提出。	10月8日から10月12日までの遭難者救助・搜索に関する状況を時系列的に伝える。遭難船調書, 紅頭嶼略図添付。	総a77-86	10月13日付。
	民政長官後藤から米国領事へ通知。	10月12日付の恒春庁長森尾からの電報を添付して, 須磨丸が到着次第, 生存者を引き渡す予定であること, これにかかった費用は追って米国領事館より支払ってほしいことを伝える。	総a25-27	10月13日立案, 10月13日決済, 10月13日発送。民政長官(委任印), 総務局長(代理大島印)警察本署長(大島印)他。
	午後11時50分, 須磨丸が安平を出発。		総a59	
10月14日	午前6時25分, 須磨丸が澎湖島到着。		総a59	
	午前9時20分, 須磨丸が澎湖島を出発し基隆へ向かう。		総a35, 59	午前9時という記述もある(総a35)。
	午前10時13分, 須磨丸船長大隅真次から海事課長鳥井勝治へ打電。	須磨丸が午前9時に澎湖島を出港し, 生存者13名を乗せ東沿岸を回航して帰航すると伝える。海事課長鳥井不在のため, 庶務課長伊藤金彌が受ける。	総a35	
	午前10時頃, 紅頭嶼に泳ぎ着いていた3名の日本人乗組員が派出所の警察官に保護される。	青木由蔵(熊本), 林重蔵(熊本), 岩藤鹿太郎(岡山)。	理737・台10/25・S82・総c26, 34, 41, 73, 87, 95, 98	11日という記述もある(理737)。



ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月14日	日本人乗組員の陳述により、紅頭嶼駐在巡查がイライタイを捜索。遭難者のものとされる物品が押収される。		総c99	
	米国副領事A. C.ランバート(領事代理)から民政長官後藤へ通知。	1月13日の民政長官後藤からの通知を受け、敏速なる生存者の救助に謝意を表し、生存者の引き渡しについてはいつでも都合次第で手配すること、費用についても計算書回付次第支払う旨伝える。	総a36-38	
	恒春庁長森尾から総督児玉へ遭難者救助・捜索に関する報告書作成。	10月13日付の警務課長荒巻による復命書を添付。以後の捜索は台東庁長に依頼すると付記。	総a76-86	10月14日付。10月19日海事課受。
	総務局長石塚英蔵不在中、警察本署長大島が代理を命じられる。		台10/15	
10月15日	午後0時40分、台東庁長相良長綱から警察本署長大島久満次へ打電。	生存者2名が紅頭嶼に漂着していることを伝え、残員捜索のため汽船の寄港を要請。	総a42-44・総c169	
	午後11時20分、須磨丸が基隆に到着。生存者13名を総督府海事課保木利吉に引き渡す。		S 74, 82・総a33-34, 49, 59	
	須磨丸船長大隅真次から総督府海事課へ詳細な捜索報告書作成。	ロシア人ウィリアムの供述、遭難船員名簿、遭難の状況についてまとめた報告、および、10月6日から10月15日までの遭難者捜索について時系列的にまとめた詳細な報告。	総a51-59	10月15日付。
	通信局長から恒春庁長森尾へ打電。	遭難者救護にかかった費用で米国政府に償還を求むべきものがあれば、至急明細書を送るよう伝える。	総a40・総b40	10月15日立案、10月15日決定。通信局長(不在印)、庶務課長(伊藤印)他。
	恒春庁長森尾から海事課へ通知。	総督へ宛てた10月14日付の遭難者救助に関する報告書に、誤って身柄領収書を添付したので返却してほしいと伝える。	総a75	
10月16日	午前9時、生存者13名が基隆から大稻埕へ到着。米国領事館へ引き渡す。	船長はじめ6名は大稻埕ホテルに、他の7名は朝陽号に宿泊。	台10/17・総a49・総b3	
	午前9時すぎ、恒春庁長森尾から通信局長鹿子木小五郎へ打電。	遭難者救護にかかった費用で償還を求むべきものがあるので現在調べ中と伝える。通信局長鹿子木不在のため、庶務課長伊藤が受ける。	総a39	
	午後1時30分、恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	米国軍艦ウィルミントン号が遭難者捜索のため鷺鑿鼻に到着したことを伝える。	台10/20・総a50, 95	

10月16日	午後3時、警察本署警部平賀安太郎が遭難者捜索および加害者検挙の命を受ける。	警部平賀は午後6時に台北から基隆へ向け出発。午後7時5分基隆到着、ただちに須磨丸に乗船。	総c82	
	午後3時20分、警察本署長大島から台東庁長相良へ打電。	遭難者捜索および加害者膺懲のため、台東庁巡査15名に警部1名を付し、須磨丸に便乗するよう伝え、警察本署より警部平賀を派遣すること、軍艦宮古も派遣する筈であると伝える。	総c168	
	午後3時35分、民政長官後藤から総督児玉（在東京）へ打電。	救助したロシア人の話からまだ生存者がいる可能性があるため、遭難者捜索のため澎湖島碇泊中の軍艦宮古を紅頭嶼に派遣し警察官を便乗させてほしい旨伝え、海軍大臣山本権兵衛に交渉して欲しいと頼む。また、只今米国軍艦が鷺鑿鼻に入港した旨電報があったと伝える。	総c165-166・公1061-1062	
	夜、須磨丸が警察本署警部平賀を乗せ、基隆から紅頭嶼へ向け出発。		理734・総a50・総b3・総c15, 72, 158・公1111-1112	
	総督から大阪商船株式会社へ打電。	10月20日基隆発の西沿定期船明石丸を大板轆より紅頭嶼へ寄港するよう要請。	総a41	10月15日立案、10月16日決済、10月16日発送。 総督（委任印）、民政長官、参事官長（後藤花押）、総務局長（代理大島印）、警察本署長（大島印）他。
	民政長官後藤から台東庁長相良へ打電。	10月16日基隆発の須磨丸ならびに10月20日基隆発の明石丸を紅頭嶼へ寄港させると伝える。	総a41	10月15日立案、10月16日決済、10月16日発送。 総督（委任印）、民政長官、参事官長（後藤花押）、総務局長（代理大島印）、警察本署長（大島印）他。
	午後9時、恒春庁長森尾から総督へ打電。	米国軍艦ウィルミントン号が長崎の米国司令長官の命を受け、大板轆に入港し、10月18日まで滞在予定であること、恒春庁警務課長が赴き遭難者救護の状況を艦長ロスハリスに説明し謝意を受けたことを伝える。	総c159-162	

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月16日	午後9時30分、総督府海軍参謀長山縣文蔵から海軍大臣山本権兵衛へ打電。	遭難者捜索及び状況把握のため軍艦宮古を紅頭嶼に回航させ、派遣した警察官にも便宜をはかってほしいと伝える。警察官は10月19日に紅頭嶼に到着予定なので、それまでに回航してほしいと伝える。	公1068-1073	
	午後9時54分、総督府海軍参謀長山縣から宮古艦長柄内曾次郎へ打電。	遭難した外国人の状況を取り調べるため軍艦宮古を紅頭嶼に派遣するよう大臣に請求したと伝える。	公1109	
	午後11時5分、海軍大臣山本から宮古艦長柄内へ打電。	遭難者捜索のため軍艦宮古を紅頭嶼に回航させ、総督府から派遣した警察官についても便宜をはかるよう伝える。	公1063, 1109-1110	
	午後10時50分、秘書官大津から民政長官後藤へ打電。	軍艦宮古の回航と警察官便乗について海軍大臣山本から宮古艦長へ電命が下されたと伝える。	総c163-164・公1064	
10月17日	午前5時30分、須磨丸が蘇湾入港。		総c82	
	午前5時30分、宮古艦長柄内から総督児玉へ打電。	紅頭嶼に回航するにあたり、総督府から派遣する警察官を便乗させるため10月17日午後基隆に回航するので警察官を連れておくこと、協議すべきことがあれば協議員を基隆に出張させ、宮古艦にて会見させるよう取りはからってほしいと伝える。	公1110	
	午前6時30分、宮古艦長柄内から海軍大臣山本へ打電。	紅頭嶼へ回航する電命に従い、10月17日午後に出発して基隆港にいたり、総督府と協議し、警察官を乗船させ紅頭嶼に向かう予定であると伝える。	公1074-1075, 1111	
	午前7時、オーストリア号が遭難者捜索のため鶯鑿鼻に到着。		台10/20・S82	
	午前9時、須磨丸が蘇湾出港。		総c82	
	午前9時、海軍大臣山本から司令官瓜生へ打電。	遭難者捜索のため軍艦宮古を紅頭嶼に回航させ、相当の処置をするよう電命したと伝える。	公1066	
	午前9時、海軍総務長官齋藤実から総督府海軍参謀長山縣へ打電。	10月16日夜に軍艦宮古を回航させ、警察官へも便宜をはかるよう宮古艦長へ電命が下されたと伝える。	公1067	

10月17日	午前9時55分、総督府海軍参謀長山縣から宮古艦長柄内へ打電。	総督府から派遣の警察官は10月16日夜に須磨丸に乗船して出発したこと、台東からも同船にて出張する予定で、10月19日朝に紅頭嶼に到着する予定であることを伝え、軍艦宮古を基隆に回航させる必要がないのでそのまま紅頭嶼に向かうよう伝える。また、途中鷺鑿鼻に米国軍艦があるので任務を通知するよう伝える。	公1111-1112	
	午前10時25分、民政長官後藤から台東庁長相良へ打電。	遭難者捜索のため軍艦宮古を派遣することになり、10月19日朝に須磨丸と同時に紅頭嶼に入港する筈と伝え、警部平賀にも通知するよう伝える。	総c149	
	午前10時25分、民政長官後藤から恒春庁長森尾へ打電。	遭難者捜索のため軍艦宮古を派遣することになり、10月19日朝に須磨丸と同時に紅頭嶼に入港する筈と伝え、この件は軍艦宮古から鷺鑿鼻碇泊中の米国軍艦にも通報する筈であるが、宮古艦長にその旨通知しておくよう伝える。	総c149-150	
	午前11時20分、民政長官後藤から恒春庁長森尾へ打電。	遭難者捜索のため10月16日夜警察本署警部1名が須磨丸に乗船し、さらに台東庁から警部1名、巡査15名が紅頭嶼に派遣される筈であるから、十分捜査が行われる予定であると宮古艦長に通知するよう伝える。	総c158	
	午後0時30分、宮古艦長柄内から総督府海軍参謀長山縣へ打電。	11月17日午後2時に出航し、都合よくいけば途中須磨丸と合流して紅頭嶼に向かうと伝える。	公1112	
	午後0時30分、宮古艦長柄内から海軍大臣山本へ打電。	総督府から警察官の行動に関し電報があったので、11月17日午後2時に出航し紅頭嶼に向かうと伝える。	公1112-1113	
	午後1時5分、恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	遭難者捜索のため軍艦宮古が派遣されることを米国艦に伝えたところ感謝の意を表されたこと、今から米国艦の歓迎会を催すことを伝える。	総c286-288	

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月17日	午後1時7分、恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	恒春庁警務課長がオーストリア号の艦長デンフィールドを訪問し、ウィルミントン号と同一の任務を帯びて来航したことを確認したこと、ウィルミントン号艦長ロースハリスが参庁した際、軍艦宮古が捜索する旨伝えと、ウィルミントン号は当分大板轆に碇泊し捜査の結果を待ちたいとの申し出があったと伝える。	総c153-157	
	午後1時15分、宮古艦長柄内から海軍大臣山本へ打電。	今、総督府海軍参謀長から総督府から出張する官吏の行動に関する電報を受けたので、10月17日午後2時に出発し、鷺鑾鼻及台東を経て紅頭嶼に向かうと伝える。	公1076-1078	
	午後2時、軍艦宮古(通報艦)が遭難者捜索のため澎湖島から紅頭嶼に向かう。		公1076-1078	
	午後3時20分、民政長官後藤から台東庁長相良へ打電。	ウィルミントン号は当分大板轆に碇泊し捜査の結果を待ちたいと同艦長から申し出があったことを伝え、軍艦宮古および警部平賀にも通知するよう伝える。	総c152	
	午後3時40分、須磨丸が花蓮入港。午後9時、花蓮出港。		総c82	
	午後7時、民政長官後藤から恒春庁長森尾へ打電。	遭難者捜索の結果は警部平賀から米軍艦に通報するよう電命したと伝える。	総c151	
	午後7時30分、総督府海軍参謀長山縣から宮古艦長柄内へ打電。	鷺鑾鼻の米軍艦は紅頭嶼の状況を聞くため待っているの、帰途に状況を通知するよう伝える。	公1139	
	ウィルミントン号は台東に到り、事実を取り調べる。		台10/20	
	オーストリア号、ウィルミントン号が大板轆に来航。		理735	
	救助者13名中2名が仏国船で上海へ向け出発。		台10/20	
	民政長官後藤から総督児玉(在東京)へ報告。	遭難の状況および10月17日までの遭難者捜索の過程を時系列的に報告。	総a47-50	10月17日立案、10月17日決済、10月17日発送。民政長官(後藤花押)、総務局長(代理大島印)、警察本署長(大島印)他。

10月17日	民政長官後藤から米国領事へ通知。	10月16日に生存者を引き渡したが、紅頭嶼の生存者捜索はまだ十分でないため、10月16日に須磨丸に台東庁からの捜索隊を便乗させ紅頭嶼へ向かうよう命じたこと、軍艦宮古も派遣して捜索することを伝える。	総b3-4	10月17日立案、10月17日受領、10月17日決済、10月17日発送。民政長官(後藤花押)、総務局長(代理大島印)、警察本署長(大島印)他。
10月18日	午前3時、軍艦宮古が鷺鑿鼻沖を過ぎる。	湾内には米国軍艦と思われる船が停泊している。	公1117	
	午前5時、オーストリア号が紅頭嶼へ向け出発。		S 82・総c146-148	
	午前5時、須磨丸が卑南入港。台東庁からの派遣者を乗船させた後、出発。	台東庁総務課長鎌田、警部近藤、警部太智清三郎、以下巡査13名、巡査補2名が乗船する。警察本署警部平賀が台東庁総務課長鎌田、警部近藤から捜索に関する意見を聞き、今後のため十分な膺懲が必要との意見を聞く。同時に台東庁から紅頭嶼派出所修理の用件を運び、台東庁属官只隈弥七郎、以下大工、人夫数名が材料をもって乗船。その後、台東庁総務課長鎌田、警部近藤の2名は退去上陸。	理734・台11/1・総b3・総c15、25、84-85	警部平賀と台東庁総務警務両課員19名という記述もある(台11/1)。警部平賀と台東庁警察官15名という記述もある(理734・総c15)。
	午前9時、軍艦宮古と須磨丸が合流。ともに紅頭嶼に向かう。		公1117	
	午前9時5分、台東庁長相良から民政長官後藤へ打電。	午前8時に台東庁から属官1名、警部1名、巡査15名を須磨丸で紅頭嶼に出張させたと伝える。	総c144-145	
	午前9時5分、警察本署警部平賀から警察本署長大島へ打電。	台東庁から属官1名、警部1名、巡査15名が須磨丸に乗船し、紅頭嶼に向け出発したと伝える。	総c141-143	
	午前10時45分、民政長官後藤から総督児玉(在東京)へ打電。	米国軍艦ウィルミントン号、オーストリア号が同一の任務をもって鷺鑿鼻に入港し、ともに遭難者救護について感謝の意を表したこと、捜査してくれるなら当分大板轆に碇泊しその結果を待ちたいと申し出があったことを伝える。	総c285	民政長官(後藤花押)、警察本署長(大島花押)他。
	午前11時50分、オーストリア号が紅頭嶼に到着。	紅頭嶼派出所の巡査一人がヤマミの船でオーストリア号にやってくる、日本人乗組員3人が生存しており、派出所にいることを告げる。	S 82、総a94・総c67・公1133	

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月18日	オーストリア号で青木由蔵の事情聴取。	艦長デンフィールドが大尉マクファーランド在席のもと、一等機関准尉ソノヤマを通訳として。	S 82、総 a94、総 c67・公1133	
	午後1時15分、恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	10月18日にオーストリア号が紅頭嶼に向かったこと、同日、恒春庁長森尾がウィルミントン号を訪問し、好意を表されたことを伝える。	総c146-148	
	午後3時、須磨丸と軍艦宮古がともに紅頭嶼の矢代湾に到着。オーストリア号の近くに投錨。オーストリア号は既に搜索を開始している。	オーストリア号の艦長デンフィールドが軍艦宮古に艦長柄内曾次郎を訪ね、情報交換。その間に須磨丸でやってきた搜索隊は上陸。	S 83・台10/20、10/25・総 a94・総 c62、86、138-140・公1117-1118	午後3時半頃到着という記述もある(総a94、総c67)。午後1時投錨という記述もある(総c62)。10月19日到着とみられる記述もある(台10/20)。
	軍艦宮古から士官2名が上陸し、派出所で遭難の始末を聴取。警察本署警部平賀も合流する。	派出所はこのときも損壊状態のまま。その状態を警部平賀が写真撮影。	総c86-87	
	午後4時30分、軍艦宮古で艦長柄内が青木の事情聴取。		理735・S 83-84・総a91-94・総c62、64-68・公1118-1119、1127-1134	
	艦長柄内が艦長デンフィールドと他の士官たちを、10月19日午前8時からの軍艦宮古による紅頭嶼沿岸巡回搜索に同乗するようすすめ約束して別れる。	夜中悪天候のため結局翌日の軍艦宮古による巡回搜索は中止となる。	S 83-84・公1120	
	須磨丸船長大隅が岩藤鹿太郎の事情聴取。	遭難の状況を聴取する。後日その内容を記した報告書を総督府海事課へ提出。	総a70-73	10月18日付。
	夕方、警察本署警部平賀と台東庁警部太智が士官2名とともに軍艦宮古に赴き、陸上の模様を艦長柄内に伝え、搜索上の協議をする。	警部平賀が米国軍艦には今回の搜索上の一切の干渉をさせないようになりたいという警察本署長大島の内旨を艦長柄内に伝え、柄内も同意する。19日朝の軍艦宮古による紅頭嶼沿岸の巡回に警部太智と派出所巡査1名が便乗することになるが、夜中悪天候のため中止となる。	総c62-63、86・公1120-1121	
	午後7時頃、須磨丸が出航。	軍艦宮古に通報無く出航。	総c62-63、86	
	午後8時、警部平賀と警部太智が軍艦宮古を退去し上陸。		総c86	

10月18日	大義丸（大阪商船）が救助者13名中8名を便乗させ淡水から香港へ出発。		台10/20・S84	7名という記述もある（S84）。
	警部平賀から警察本署長大島へ10月18日付の第1回報告書。	10月16日～18日までの状況を時系列的に報告。	総c82-89	
10月19日	午前7時25分、警部平賀から警察本署長大島へ打電。	10月18日に捜索隊一行が紅頭嶼に到着し、軍艦宮古と米国艦も入港していること。宮古には警察本署長大島からの電報ならびに捜索隊一行の到着を通知したことを伝える。	総c138-140	
	午前8時、須磨丸船長大隅真次から大阪商船会社基隆支店長へ打電。	軍艦宮古と同行して紅頭嶼に到着し、日本人3名を救助したこと、米国艦一隻も来泊していることを伝え、海事課への通報を頼む。その後、基隆支店から総督府へ左記内容を電話で伝える。	台10/20・総a45-46	
	午前8時、警部平賀が巡査14名を率いて出発、午前9時イライタイに到着し捜索。	ヤミの人は汽船の到着するのを見て、すでに山中に家財をもって逃げた後であった。2時間の捜索の結果、一軒の家屋内から遭難者のものとされる物品数点を押収。また、山腹捜索中にヤミの人と仮小屋を発見、数発の威嚇射撃をしたため、恐怖し遭難者のものとされる物品を遺棄する者あり。	総c27, 104-105, 113	
	午前9時、警部太智一行が軍艦宮古に来艦。艦長柄内が軍艦宮古による巡回中止の旨を告げる。警部太智は陸上捜索の模様と20日から2隊に分けて捜索する計画を伝える。		総c63, 105・公1123	
	午前10時、警部太智一行が派出所に戻る。		総c105	
	午後1時、台東庁長相良から民政長官後藤へ打電。	日本人遭難者3名が派出所に救助されていること、ヤミの人による加害行為、他の遭難者の溺死、軍艦宮古と米国艦の入港について捜索隊から報告があったと伝える。	総c134-136	
	午後1時30分、警部平賀率いる捜索隊一行がイモロナモンの派出所へ引きあげる。		総c105	



ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月19日	紅頭嶼派出所において警部太智が日本人生存者の岩藤、林に対して事情聴取。	10月19日付聴取書。もう一人の生存者青木は10月18日に宮古に乗船してから派出所に戻らず、海上捜索上の便宜のため、宮古艦長の求めによってそのまま宮古に便乗。青木は元海軍機関兵で宮古にも知人がいる。	総c30-36, 73, 89, 90-96	
	紅頭嶼駐在巡査有賀が台東庁警務課長警部大山十三郎へ報告書。	10月10日～14日までの詳細な状況を時系列的に報告。	総c97-99	10月19日付。
	軍艦宮古乗組員一同から澎湖庁長小林へ、日本人生存者に対する義捐金を集めたので各自に配当して欲しいと通知。	222名記載の醸金名簿添付。義捐金の合計25円77銭。	総b72-84	10月19日付。
10月20日	朝、ウィルミントン号は19日夜からつづく強風のため紅頭嶼に近寄れず大板轆に投錨。	オーストリア号と宮古からは消息なし。	台10/21	
	午前10時35分、恒春庁長森尾から民政長官後藤へ打電。	東北の風が強烈なため、10月19日夜からウィルミントン号が出航し他に避難したと伝える。	総c132-133	
	海門丸(英商グラス汽船会社)が遭難船長及び家族を便乗させ香港へ出発。	当初、10月20日に台中丸(大阪商船)で長崎へ向かう予定であったが、急遽変更。後日、船長含む救助者の何人かは横浜に到り、伊予丸でカナダのビクトリアへ。その後、船長とその家族は、ワシントンのポートタウンセンドに行き、ベンジャミン・セオール号オーナー(A.M.セオール)に事の詳細を報告。	台10/20, 10/21・S74	
	須磨丸によって派遣された警察官と駐在する警察官とが二手に分かれ紅頭嶼を捜索開始。		台10/23・総c63	
	午後5時、高波のため碇泊が危険となり、軍艦宮古が紅頭嶼から台湾西岸へ向け出発。オーストリア号も同時に宮古の後について出発。		S84・総c26, 63, 105・公1082, 1125	
	民政長官後藤から米国副領事ランバートへ通知。	須磨丸船長から日本人3名を救助したことを伝える電報が10月19日にあったことを伝える。	総a45-46, 60-61	10月19日立案, 10月20日決済, 10月20日発送。 10月19日付。民政長官, 参事官長(後藤花押), 総務局長(代理大島印), 警察本署長(大島印)他。

10月21日	午前、軍艦宮古が澎湖島に到着。		台10/22・公1137	
	午前8時、捜索隊(警部平賀、警部太智以下巡査16名)がイモロナモンからイワキヌへ向け出発。		総c105-106	
	午前10時、捜索隊がイワキヌに到着し捜索を開始。	14、5名の壮年男子を残し、他は山中に家財をもって逃げている。説諭の後、家屋内の捜索をし、遭難者のものとされる物品数点を押収する。家屋捜索中、壮年男子等も山中に逃げる。イラタイと同様威嚇射撃をし、遭難者のものとされる若干の物品を押収する。	総c27, 105-107, 114	
	午前11時20分、宮古艦長柄内から海軍大臣山本へ打電。	日本人3名を救助したが、のこり7名については生存の可能性が低いこと、ヤミの人は強盗をしたのでなく追い剥ぎをしたのであり、人殺しはもとよりないと伝える。警察官による捜索は続けられていること、オーストリア号と会合し意見交換したこと、日本人生存者3名の内、青木だけを澎湖島に連れ帰ったと伝える。	公1081-1098, 1113-1115	
	午前11時20分、宮古艦長柄内から総督府海軍参謀長山縣へ打電。	先に発見された2名と今回発見した日本人3名のほかに生存者を確認できなかったこと、警察官が10月20日から全島を捜索中であること、米国艦とも会合したこと、ヤミの人に対する誤報を打ち消してほしいと伝える。	公1135-1136	
	午後3時、捜索隊がイワヌミルクに到着し捜索を開始。	入口に遭難者のものとされる物品を残し置き、すでに山中に逃げている。仮小屋の材料となるべきものも悉く持ち運ばれている。山中を捜索するも得るところ無く、午後6時に捜索隊はイワヌミルクに引きあげ、この日はイワヌミルクに泊まる。	総c27-28, 107-108, 114-115	
	明石丸(大阪商船)が須磨丸によって派遣された警察官一行を乗せて帰る命を受け、紅頭嶼へ向け出発。		台10/21, 11/1	
	午後2時、オーストリア号が電報をもったボートを岸に送るため打狗に寄港。		S 84・総a62-63	

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月21日	午後6時、オーストリア号が香港に向け出発。		S 84・総a62-63	午後5時という記述もある(S 84)。
	午後6時、総督府海軍参謀長山縣から宮古艦長栃内へ打電。	須磨丸からは生存者のことのほかに通信がないこと、警察官の捜索が終了したら米国艦に軍艦宮古から状況通知をしてほしいこと、派遣した警察官は軍艦宮古に便乗させ帰着させる計画のため再度紅頭嶼に回航してほしいと伝える。	公1139-1140	
	鳳山庁長川田久喜から総督へ打電。	午後2時にオーストリア号が打狗に寄港したこと、午後6時に香港に向けて出港したことを伝える。	総a62-63	総督児玉不在のため後藤が受信(後藤花押)。
10月22日	早朝、宮古艦長栃内から総督府海軍参謀長山縣へ打電。	10月21日の電報で米国艦というのはオーストリア号を指すこと、オーストリア号は香港へ向かったようであること、紅頭嶼への再度の回航については海軍大臣の命令を待つと伝える。	公1141-1142	
	午前6時、捜索隊がイヌミルクを出発し、午前10時イモロソックに到着。	イモロソックは遭難事件に関係ないと認められる。	総c28, 108-109	
	午前11時35分、総督府海軍参謀長山縣から海軍大臣山本へ打電。	軍艦宮古は澎湖島へ帰航したが、米国軍艦が紅頭嶼へ行くもようがあり、また捜索実行中の警察官を台東まで便乗させてほしいと民政長官から請求があり、再度紅頭嶼へ回航するよう訓令してほしいと伝える。	公1100-1104	
	午前11時45分、海軍大臣山本から宮古艦長栃内へ打電。	台湾総督から更に請求がなければ、固有の任務に復してよいと伝える。	公1079-1080, 1139	
	午後1時、捜索隊がイモロソックを出発し、午後3時10分ヤユに到着。	ヤユは遭難事件に関係ないと認められる。	総c28, 109	
	午後4時、捜索隊がヤユを出発し、イワタスに到着。	イワタスは遭難事件に関係ないと認められる。	総c109	
	捜索隊がイワタスを直ちに出发し、イラタイに到着。	イラタイを再度捜索するが未だヤミの人は帰村しておらず、捜索隊は附近の捜索をしながらイモロナモンへ向かう。	総c109	
	海軍総務長官齋藤から総督児玉へ打電。	台湾総督から更に請求がなければ、軍艦宮古に固有の任務に復すよう打電したと伝える。	公1080	

10月22日	海軍大臣山本から司令官瓜生へ打電。	台湾総督から更に請求がなければ、軍艦宮古に固有の任務に復すよう打電したと伝える。	公1080	
	午後4時30分、海軍総務長官齋藤から総督府海軍参謀長山縣へ打電。	更に請求があれば、総督府から直接宮古艦長に打電されることになっていると伝える。	公1099	
	午後6時20分、捜索隊がイモロナモンの派出所に到着。	イモロナモンの人はイラタイにあった遭難者のものとされる物品を持参するなど捜索隊に協力する。	総c28, 109-110	
	午後7時35分、総督府海軍参謀長山縣から宮古艦長柄内へ打電。	軍艦宮古を再度紅頭嶼に回航させてほしいと伝える。	公1142	
	宮古艦長柄内から総督府海軍幕僚へ通知。	10月18日～22日までの捜索概要を伝え、青木の証言などからもはや軍艦による捜索の余地はないと伝える。10月18日同船でおこなった青木の聴取に関する書類も添付。	総c62-68	10月22日付。
	宮古艦長柄内から海軍大臣山本へ通知。	遭難者捜索の顛末について、電報のやりとりの資料を添付して詳細に報告。	公1107-1136	10月22日付。 10月30日接受。
	澎湖庁長小林三郎から総督児玉へ通知。	青木の身柄を引き取ったことについて青木の遭難顛末書を添付して通知。最近の便船で基隆庁まで送致する予定であることも伝える。	総a90-94・総c63	10月22日付。
	澎湖庁長小林から総務局長石塚英蔵へ通知。	軍艦宮古乗組員からの義捐金25円77銭を日本人生存者に対して配当して欲しいと伝える。醸金名簿など関係書類一式添付。	総b71	10月22日付。
	米国副領事ランバートから民政長官後藤へ通知。	10月19日付の後藤からの通知に対する謝意と、いつでも日本人3名を引き取る用意があることを伝える。	総a60-61	
10月23日	午前8時、オーストリア号が香港に到着。	少佐デンフィールドが総領事を訪ね、捜索の詳細を報告。	S 84	
	午前8時、ヤユの人12名がイラタイから押収した物を持って、イモロナモンの派出所にやって来る。		総c110, 116-118	
	早朝、宮古艦長柄内から総督府海軍参謀長山縣へ打電。	警察官を帰着させるためだけなら商船を特派すれば足りると伝え、軍艦宮古を特派する理由があるか、米国艦が紅頭嶼に引き返すという根拠があるかを問う。	公1142-1143	

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) 一台湾ヤミの生活環境史一 (足立 崇)

10月23日	午後2時55分、総督府海軍参謀長山縣から宮古艦長柄内へ打電。	前回の電信請求を取り消し、10月27日に明石丸を紅頭嶼に寄港させること、総督より軍艦宮古の労に謝意が表せられていると伝える。	公1143	
	午後8時、宮古艦長柄内から海軍大臣山本へ打電。	台湾総督からの請求が完了したので固有の任務に復すと伝える。	公1105-1106, 1144	
	オーストリア号艦長デンフィールドから神戸にいる米国アジア艦隊司令長官に捜索の詳細を通知。		S 82-84	10月23日付。
	須磨丸が基隆に到着。		台10/21	
	米国副領事ランバートから民政長官後藤へ通知。	10月10日付のオロ号船長コールマンから長崎のロイドエージェントへ宛てた報告書を添付し、海上にベンジャミン・セオール号がいまなお漂流しているため、航行の危険があることを伝える。	総a65-69	10月23日付。
	恒春庁長森尾から通信局長鹿子木小五郎へ通知。	10月15日付電報に対する回答。遭難者救護船賃については須磨丸船長から直接総督府へ交渉がなされること、その外の救護費として16円80銭があることを内訳を明記して伝える。	総b140-142	
10月24日	民政長官後藤から大阪商船会社基隆支店長と日本郵船会社基隆出張所長へ通知。	10月23日付の米国副領事ランバートからの通知を受け、ベンジャミン・セオール号漂流地点を伝え航行時に警戒し注意するよう伝える。	総a64	10月24日立案, 10月24日決済, 10月24日発送。
	捜索隊一同は捜索の手を緩め、休養する。		総c121	
	警部平賀から警察本署長大島へ第2回報告書。	10月19日～23日までの詳細な状況を時系列的に報告。押収物品の目録含む。	総c102-118	10月24日付。
	宮古艦長柄内から海軍総務長官齋藤へ報告書。	紅頭嶼派遣の任務を結了したことを、総督府との電報による協議内容を添付して報告。	公1137-1144	10月24日付。接受11月7日。
10月25日	午前8時頃、イモロナモンの人10数名が家畜などを携え山中に逃げる。		総c122	
	午前9時、ヤユとイモロソックの人がイワヌミルクから押収した物を持って派出所にやってくる。		総c122, 124	
	午後3時、明石丸が紅頭嶼に到着。		総c122	

10月25日	午後5時、捜索隊一行および遭難日本人2名(林, 岩藤)が明石丸に乗船。夜半、明石丸が紅頭嶼を出発。	捜索隊の内巡査4名は残留し、紅頭嶼派出所巡査4名とともに捜索の継続を命じられる。	総c26, 29, 41-42, 72, 121-122	
10月26日	夜、明石丸が紅頭嶼から卑南に入港するも、風波荒く上陸できず。黒岩湾に回航して捜索隊を上陸させる。		台11/1	
	総督府海軍副官磯部謙から警察本署長大島へ、宮古艦長枈内からの遭難者捜索に関する22日付の報告を回付。		総c62-70	
10月27日	午後7時、明石丸が卑南に到着するも、風波荒く上陸できず。午前8時、出発。		総c122-123	
	午前11時、台東庁長相良から民政長官後藤へ打電。	明石丸が卑南に寄港したが、風波荒く上陸できず基隆に向かったため、捜索の状況を知ることができなかったと伝える。	総c127-131	
	午前11時、明石丸が成廣湾に到着。台東庁派遣の警察官等が上陸。		総c123	
	午後12時、明石丸が成廣湾を出発。		総c123	
	宮古乗組員221名が生存者に対し義捐金を醸出し、澎湖庁長に配当を依頼したと報じられる。		台10/27	
10月28日	午後5時、明石丸が蘇湾に寄港。		総c123	
10月29日	午前7時、明石丸が蘇湾を出発。		総c123	
	午後2時、明石丸が基隆に到着。警部平賀と遭難日本人2名(林, 岩藤)が上陸。		台10/31・総c72-73, 123	
	午後4時2分、警部平賀から警察本署長大島へ打電。	基隆に到着したこと、汽車で帰府し、遭難者2名を連れ帰ることを伝える。	総c125-126	
	午後6時発の汽車に乗り警部平賀が帰府。兩名を米国領事館書記磯田マサトモに引き渡す。青木は便船の都合でいまだ澎湖島に滞在。		台10/31・総c72-73, 123	

ベンジャミン・セオール号事件の経過 (1) ー台湾ヤミの生活環境史ー (足立 崇)

10月29日	澎湖庁長小林からの10月22日付の義捐金配当に関する申し出について、日本人生存者5名(林、青木、岩藤、花井、岩田)に対し、均等配当することになる。	義捐金は合計25円77銭。各自に5円15銭4厘ずつ均等配当。花井と岩田はすでに香港へと出航しているため、台湾の米国領事から香港の米国領事に送付の上、配当してもらうことにする。	総b66-84	10月26日立案、10月27日受領、10月29日決済。総督(代理印)、民政長官、参事官長(後藤花押)、総務局長(代理大島印)他。
	岩藤と林が義捐金各5円15銭4厘を受領。		総b68-69	
10月30日	米国側が台北医院で岩藤に事情聴取。	紅頭嶼に漂流したときのことを詳細に状況説明。米国領事館書記磯田マサトモが翻訳。	理737・総b16-37	
	警部平賀から警察本署長大島へ上申書。	紅頭嶼にて遭難者捜索の際、ヤミの人から押収した物品の一部を日本人生存者3名に便宜上使用させたと伝える。	総b53	10月30日付。
	警部平賀から警察本署長大島へ復命書。	遭難者の生死、捜索の結果、押収した物品の処置、押収物品目録について報告。	総c72-80	
	警部平賀から警察本署長大島へ第3回報告書。	10月24日～29日までの詳細な状況を時系列的に報告。押収物品の目録含む。	総c119-124	10月30日付。
	捜索隊が台東庁に帰庁。		総c41	
10月31日	午前11時50分、台東庁長相良から民政長官後藤へ打電。	捜索隊の帰庁をうけ、捜索の概要と今後の手配を報告する。	総c41-47	

## 謝辞

本稿は平成23年度科学研究費補助金若手研究(B)21760508の成果の一部である。

本稿をまとめるにあたり、台湾ヤミ文化研究会(FYCS研究会)で発表の機会をいただき、質疑応答の際、多くのご教示をいただいた。とくに三富正隆氏からは、当時の日米関係や日露関係のことなど貴重な示唆をいただいた。また、乾尚彦氏からは現代の住民たちの事件に関する認識について貴重な情報をいただいた。記して謝意を表したい。

## 参考文献

DOUGLAS EGAN, *SHIP - BENJAMIN SEWALL OTHER DAYS OF SHIPS & MEN*,  
YE GALLEON PRESS FAIRFIELD, WASHINGTON, 1983

稲葉直通・瀬川孝吉, 『日本の南端 紅頭嶼』, 生き物趣味の會, 1931

伊能嘉矩, 「台湾外交史料 ベンジャミン, セオール号事件(一)」, 『東洋時報』225,  
pp.50-54, 1917

「台湾外交史料 ベンジャミン, セオール号事件(二)」, 『東洋時報』226,  
pp.46-50, 1917

- 「台湾外交史料 ベンジャミン、セオール號事件（三）」、『東洋時報』228, pp.27-30, 1917
- 『公文雜輯 艦船三止・水路』卷4 (M36-4), 海軍省, 1903, 防衛省防衛研究所所蔵  
呉市海事歴史科学館, 『日本海軍艦艇写真集 航空母艦・水上機母艦』, ダイヤモンド社,  
2005
- 『旧植民地人事総覧 台湾編1』, 日本図書センター, 1997
- 松浦 章, 『近代日本中国台湾航路の研究』, 清文堂, 2005
- 森丑之助, 「台湾蕃族に就いて」, 楊南郡 (笠原成治, 宮岡真央子, 宮崎聖子 訳), 『幻の人類学者 森丑之助』, 風響社, 2005
- 『大阪商船株式会社五十年史』, 大阪商船株式会社, 1934
- 『大阪商船株式会社八十年史』, 大阪商船株式会社, 1966
- 台湾経世新報社, 『台湾大年表』, 1938 (南天書局復刻版 1994)
- 『台湾民報』 (明治33年8月8日から明治37年3月29日まで発行), マイクロフィルム,  
ゆまに書房
- 『台湾日日新報』, 台湾日日新報社, マイクロフィルム, ゆまに書房
- 台湾総督府警察本署 (伊能嘉矩編), 『理蕃誌稿』第1巻, 1918 (南天書局復刻版 1995)
- 『台湾総督府公文類纂』4749冊-2号, 1903, 国史館台湾文献館所蔵
- 『台湾総督府公文類纂』4810冊-1号, 1903, 国史館台湾文献館所蔵
- 『台湾総督府公文類纂』4811冊-1号, 1903, 国史館台湾文献館所蔵
- 『台湾総督府公文類纂』4814冊-3号, 1904, 国史館台湾文献館所蔵
- 余光弘・董森永, 『台湾原住民史 雅美族史篇』, 臺灣文献獻委員會, 1998